

白百合になれないけれど聖水で十字架をきる日曜の朝
 土を捏ね愛する人の胸像を創るようなり愛することは
 私の胸像創りたる人のアトリエにある他の胸像
 さりさりと清姫のごと蛇と化す感覚を知る私の身体
 静脈の模様の大理石ならば鑿のみでざっくり傷つけていい
 どの角度からも見えない「接吻」が美しきことロダンは知りぬ
 抱擁のために捻った背の螺旋 天まで届く階段となれ
 私の内臓食らう蛆つきのトランジ像を免罪符にす
 裸婦像は蹲りたり浮き上がる背骨に意志の強さを秘めて
 月明かり吸わせばワルツ踊り出す彫刻の影そより佇む
 心臓のあたりを篋へらで削りとり翡翠の石を埋めたくなる夜よ
 駒鳥の卵の色の小箱なら入れてもいいよ我の心臓
 完成をすることはない眼裏に君の胸像創り続ける
 石膏で固められたら私は鶴の形をしているでしょう
 死後土に還るのなら君の手で激しく捏ねよ我を再び



インターネットで男女が踊る像を見つけ衝撃を受けた私は像を作った人物を調べました。カミーユ・クロードの「ワルツ」という作品でありました。発想の源はカミーユと師であるロダンの二人の彫刻家ですが、十五首全てが彼らを詠ったわけではなく、カミーユの生き方に女として、芸術に携わる者として、共感した私の心情を、存在しないアトリエにて詠いました。

選にあたって

土を捏ねたり、大理石を鑿で削ったり、石膏で固めたりして、さまざまな胸像が創られる。胸像を創ることは愛することと重なり合う。心と身体の両面から相手を求め、さらに自分自身と向き合う姿に、真摯な迫力を感じた。「静脈の模様の大理石」「浮き上がる背骨」「駒鳥の卵の色的小箱」など細部の描写にも独自性がある。日常の些事から離れ、芸術性を保ちつつ一連十五首のトーンを整えたところに作者の力量がうかがえる。

(栗木 京子)

キリスト教信仰のもとに、「愛」の姿を創りだそうとする「胸像」は、反現代の姿勢に貫かれている。残酷な美しさを求める激しい情念が息苦しいほどだ。強くて重量感のある言葉とリズム、濃厚な信仰に似た愛情表現。迫力あふれる反現代の十五首だった。

心臓のあたりを篋くわで削りとり翡翠の石を埋めたくくなる
夜

一連の中の「君」は、しだいに「神」と一体化していくのである。

(佐伯 裕子)

みずからの胸像を創るという行為に仮託して、無難に豊かに生きてきた半生を慈しむ。夫を愛し、かつ齡と共につのる自愛の念を確かめる一連となっている。みずからの胸像をイメージアップするための想像的行為も、かなりリアリティをもつ表現をとめない、描写力も美しいものになっている。こうした浪漫への憧れが抽象化された作品は珍しい。とかくナルシズムに陥かねないモチーフを救った、作者の想像力の成果を認めたい。

(篠 弘)

栗木 京子 選

選者賞 あの日から十年目 前畠 一博（兵庫）

剥き出しの鉄骨さらす一号機デブリ回収できぬ原発

シヨールーム壊れしままの販売店 大熊・双葉の止まりし時間

町民の九割戻れぬ浪江町若き笑顔の戻るはいつか

野晒しの黒き袋の除染土の最終処分は未定のままに

処理できず増え続けゆく汚染水溜まり続ける腹水のごと

堤防は高く大きく聳えをり海の風すら遮るやうに

周辺の解除はじよじよに進みゆき戻れぬ人と戻らぬ時と

今もまだ牛舎に残る齧り跡つなぐれし牛の齧りし柱

生乳を穴に捨てたる牛飼ひは風のごとくにその地を去りぬ

移り住むはずの高台高騰し村人たちは離れ離れに

もつと見ておけばよかつた海になる前のふるさとあの街のこと

人気ない街をうろつく野良犬の汚れし首輪痩せ細る首

今生きて息子が在るのは避難所の夫婦がくれしあの飴のおかけ

あの日から逃げずあの日と向き合ひてあの日に生まれし娘と共に

震災の思ひ出したくないことも私をつくる私の欠片

選評

近藤芳美氏は社会に生きる一員としての「個」の声を大切にした歌人である。そうした氏の理念を反映し、今回も現実に立脚した生身の思いの伝わる作品が多く寄せられた。

選者賞「あの日から十年目」の前畠一博さんは東日本大震災による原発事故から九年を経た東北を見つめている。詠み続けるべきテーマである。

「町民の九割戻れぬ浪江町」「堤防は高く大きく聳えをり」「移り住むはずの高台高騰し」などの現状が描き取られており、胸に迫る。しかし一連の終わりで、作者が悲しみを受容しつつも力強く「あの日」を振り返っていることに励まされた。

奨励賞「割れた硝子」の吉野佳子さんは高齢の父との暮らしを詠んでいる。介護は世代を超えた課題と言える。「合歡の葉の眠る時刻に軍手はめ父は箆筒と格闘始む」に詠まれているのは夜間譚妄の症状が出た父だが、眼差しに包容力が感じられる。深刻な事態と静かに向き合う作者の聡明さが心に残った。

奨励賞「異国に」の森田公子さんは、コロナ禍にあつて外国で暮らす息子に思いを馳せている。現地的女性と結婚してもうすぐ孫が生まれるのだが、なかなか会えない。日常を独自の視点から描いた一連である。

奨励賞

割れた硝子

吉野 佳子（熊本）

父ではない父がわが手に継りつく「助けてくれ」とずつしり重く

父のもつ「夜間譚妄」「譚」の字がほかの文字より太つてしまふ

C Tに映らぬ父の脳なづきには海の匂ひと海の色あり

合歓の葉の眠る時刻に軍手はめ父は簞笥と格闘始む

ニンゲンの言葉通じぬ夜の父ひとつ屋にして夜明けを待てり

父残し人と会ひたる日の夕ゆふべかかりし虹は足元より消ゆ

戦ひの残骸のみが積まれゐる父居し部屋の窓開け放つ

硝子戸の割れてストープ倒れたる修理可能な父の空き部屋

父の部屋の硝子の欠片拾ひつつ我の心の硝子も拾ふ

父とわれ不在の家の冷蔵庫発酵すぎたヨーグルト立つ

押入れの隅に蜜柑と父の服包まれすでに発酵しをり

四次元のポケットなのかと驚きぬ父の服より小物出で来る

霜の朝割れた硝子の冷たさと記憶を共に資源ごみへと

父在さぬ家の未明に目覚めたり雨降る音のうるほひのなか

真夜中に簞笥引き摺る音消えて二週間目の朝日が昇る

奨励賞

異国に

森田 公子（東京）

あと幾度生身で吾子らと会えるのか異国に住むとはそういうことだ

飛行機の魔法のような当たり前夕暮れに発ち着くはまた昼

吾子は言う空路でたかが十時間されどコロナ禍異国は世の果て

新しい世の中だから新しいウイルス一つで世界は止まり

桜散りあやめは終わり紫陽花の色褪せてまだコロナの渦中

手振り合うテレビ電話の夜と昼日付変更線を跨いで

海を越えかの大陸から繋ぎ来る吾子の姿は一千万画素

来春は初めて親になるというその温もりを焦かいながれる腕

庭道に帰化植物のはびこれる長実ひなげし常磐露草

菜園に毎年もぎし茄子胡瓜異国に盆の牛馬はいない

異国では吾子はその地の異邦人言葉は通じる有色人種

新妻は異国の言葉で笑み咲けりそれは生まれる赤子の母国語

おそらくは我は知り得ぬ生まれ来る孫が長じて選ぶ国籍

密やかに我が遺伝子の配列はかの大陸の未来へ続く

楓ふうと書くカエデではない街路樹のアメリカフウの棘々の球果

佐伯 裕子 選

選者賞

冷静の祭

大

甘（沖繩）

蟬時雨とおなじ高さの階段を下りて蟬時雨の下をゆく

それでもまだ沈まない陽の灼熱がアカギの枝のフラクタル越し

しろじろと乱視に滲む夕月に蜻蛉その身を黒く過らせ

コンビニの結露の窓の夜しろく光って函のなかが見えない

洗いながら首のかたちにてのひらを鑄型をつくるように這わせて

静寂に鳴る救急車遠くから遠くへひびくサイレン 眠る

百円の海洋博の波柄に輪ゴムはりつく抽斗の底

マンションをみずのながれる音のして守宮よなにを思い出したの

世界中の人を愛しているよって耀耀と言う君のくちびる

あの人を商店街に追いかけてあやまろうとした鳴った目覚まし

玄関の闇に馴染んだ消火器の赤のようにには悟れないから

食パンに蜜ぬり終えて今朝もまた沖繩島で匙を舐めてる

あかつきの駅舎の下の緑濁の川に子鮫は息を吐いて

ふおうおうとユーエフォーのエンジンの音して東陽バス坂下る

まぶしいのはまだくりかえし朝となり吹く海風の塩のかがやき

選評

「冷静の祭」は、日々を冷えた祭とする現代の姿を暗示している。コロナ禍の新しい日常を背景にして読むと、冷静な祭のような日々が見えてくる。その中の何気ない暮らしから、微妙な違和感とつまづきを浮き彫りにするのである。軽い口語で作られているが、現実への批評眼の徹った一連と思われた。

蟬時雨とおなじ高さの階段を下りて蟬時雨の下をゆく

コンビニの結露の窓の夜しろく光って函のなかが見えない

食パンに蜜ぬり終えて今朝もまた沖繩島で匙を舐めてる

まぶしいのはまだくりかえし朝となり吹く海風の塩のかがやき

一首目、常套的な「蟬時雨」だが、下句によって現代社会の蟬時雨を成立させている。冷えた夜の二首目も下句への展開が新鮮だった。冷えた夜の祭であるはずのコンビニ、その中味が見えなくなったのである。くりかえす日常を表す三、四首目にも惹かれた。ことに四首目の「まだくりかえし」の「まだ」の不穏さは絶妙だ。

微妙に冷えていく日々の祭を、生活の細部に着目しつつ、批評を籠めてうたわれた十五首であった。

奨励賞

春のステレオ

小笠原啓太（千葉）

誰一人マスクをつけていないからここが夢だとすぐにわかった
うららかな日差しでパンを温めるわたくしなりの早起きをして
陽を浴びて賢治の詩を口ずさむ「コロナは八十六万二百」

口腔は宇宙のごとく蠢いて口内炎の星座が一つ

重要な放送かなと聞き耳を立てれば廃品回収の声

隣の空を見つめる春の朝一周忌には行けずごめんね

手を合わすあなたが眠る方角にマスクの鼻の折り目を向けて

耳鳴りがしている男女数人の嗽の声が 春のステレオ

階段に等高線を保ちつつ僕たちはただ明日を待った

浴槽にすね肉煮込みとして浸かり休業明けの疲れを溶かす

電卓を二度打ち直し本日の売り上げを読む いち、じゅう、ひやくと

少しでも明るいニュースを探してたベッドの上に灯る液晶

寝とぼけた耳が「なんとかなる」と聞く暴走族のエンジン音に

母とした半年ぶりのおはようは不織布越しのおはようだった

それぞれの角度を持つて降り積もるマスクに埋め込まれたはりがね

奨励賞

バニラアイス

久藤 さえ（神奈川）

白地図にふたりで暮らす空っぽのフォトフレームを出窓に置いて

水曜のシャツは決まってストライプそれがあなたのさみしさですか

やわらかな声の湿度に抱かれたり天気予報を背で聴くとき

新婚はどう、と訊かれてそういえば映画館へは行かなくなりぬ

夏柳 指輪の細き刻印が身元の証となる日のことを

光るのは逃げてゆくもの 六月の魚、秒針、シャッターチャンス

ふと息の浅さに気づくスクリーンセーバーの泡ばかり見えていて

片足で描く円のよう旧姓のままの名刺とメールアドレス

お互いの後ろ姿を探しあう時間が好きだ 駅の書店で

「わたしたち」と「わたし」の間に立ちつくす中央分離帯のひまわり

夕空に蝙蝠の影ちぎれてもやがては同じ空へと帰る

彗星の尾の冷たさを思いつつシンクに零す銀のスプーン

最小の運命共同体としてバニラアイスを今宵分け合う

雨音につつまれ眠るあなたから眼鏡を外すひそかな儀式

帆船を見送るようにしばらくはひらいたままの奥付がある

選者賞

青き地球

田村美和子（新 潟）

人類が宇宙の遙かかなたから初めて見たる地球の青さよ

青深き地球は誰のものならむ生きとし生けるものの棲みゐる

百万の絶滅危惧種を思ふとき紛れもなくてわれも罪人

学名がニッポニアニッポンとふトキも国鳥キジも絶滅危惧種

人間の飽くことのなき欲望がやがて破滅を招く予感す

開発といふ名のもとに起重機がひねもす稼働す町のそこそこ

地に還らぬプラスチックの容器など大量生産大量放棄

使用済みの核燃料の捨て場所が地球の何処にあるといふのか

認知症の兆候見せて狂ひたる地球を救ふ妙薬ありや

体温を越ゆる暑さと線状の降水帯に怯えしこの夏

南極の氷の解ける勢ひが近年加速せしとふ不安

人類が試めされゐるや目に見えぬコロナウイルスとの共生の日々

対岸の火事にあらずや欧州の四十五度を越えし熱波は

温暖化はもう許せぬと奔走せし少女が世界を動かし始む

破壊せし青き地球を人類が修復せねば罪滅ぼしに

選評

篠選の「青き地球」は、病んだ地球をテーマとした。大柄な批判力をもった一連。「温暖化はもう許せぬと奔走せし少女が世界を動かし始む」など、納得のいく作品も多いが、自分に惹きつける力がさらに欲しかった。

奨励賞の「祈りの島」は、隠れキリシタンをテーマとした、内容のある作品。「貝殻をマリアに見立て信心す聖なる島のオラシヨの形」など、取材がゆきとどいていたが、訪れた崎津教会の範囲に終始する。島民の細部も描出され、適切な取材力を認めるが、旅行詠のイメージが残る。

やはり奨励賞の「父の絶筆」も、注目すべきものであったが、題名に反し、父の歌は三首にとどまった。むしろ「丸木美術館」へなどとモチーフが拡散する。顕著に反戦思想を追っているが、広がり過ぎた観がある。「終戦後はじめて手にした教科書の一部は墨で伏されてをりき」などは、類歌がある。

どうもこの「近藤芳美賞」には、個人の回顧詠は相応しくない。個人にとって貴重な体験詠も、回想の形を取ると甘くなりかねないものとなる。現在勤しんでいる仕事や、時代に対する批判、家族愛、変貌していく都市など、自分が参加した一連が欲しいと思う。

奨励賞

祈りの島

船岡 房公（滋賀）

天草の羊角湾の奥深く潜みてゐたり崎津の村は

禁教の軛枷られ迫害を受くるも祈り伝へし信徒ら

港辺に網手入れする老漁夫の背越しに「海の天守堂」見ゆ

尖塔の上に十字架を掲げたるゴシック様の崎津教会

教会の窓絵硝子に象りしすずらんの花 仏蘭西国花

貝殻をマリアに見立て信心す聖なる島のオラシヨの形

磯の上に海に向かひて祈りをる白亜のマリア像佇ちにけり

天草の夕日八景ひとつなる海上マリア慈愛に満つる

御神酒撒きマリアの像に十字切る崎津漁師の手の深き皺

荒れ狂ふ海で漁師はロザリオを握り夜通し祈りし日あり

下島の原生林の椿木は村を潤す貴き油に

椿の実絞りにて採りし聖き油は切支丹らの生活の支へ

黄に澄みし椿油は村人で均しく分くる島の習はし

照らされてぬばたまの夜にくきやかに泛び上がりし聖天守堂

信徒らの唱ふ清らかな讃美歌は響き渡りぬ島の聖夜に

奨励賞

父の絶筆

石橋 嘉子（千葉）

コロナ禍にも天皇后臨席され全国戦没者追悼式すすむ

コロナ禍に縮小されし式典の国歌斉唱演奏のみなり

特攻隊・予科練・ゼロ戦・回天ら今過ちとして国民みとむ

狭き門三パーセントを突破して父は少年電信兵となりき

「常にわが無事を確信し冷静なれ」と「鳥海」より届きし父の絶筆

黒布で覆ひし灯下に戦時中の祖父はラヂオに聞き入りをりき

ミシン踏む母の背中の中の丸まりて吾を守らむ音すさまじき

終戦後はじめて手にした教科書の一部は墨で伏されてをりき

黒塗りの公開文書に混乱の戦後の暗き時代重なる

都幾川の流に故郷の川重ね埼玉県に丸木美術館建つ

描かれし「幽霊の行列」に息止まる丸木夫妻の怨念ここに

「黒い雨」全面勝訴せしもなほ「平和の灯」のもと原告苦しむ

「黒い雨」全面勝訴は当然なりされど核廃絶の道まだ遠く

敗戦に座敷に灯りの点きし日の喜びからはや七十五年

心のうち訴ふるすべに歌のあり詠みて戦死の父を偲びぬ

果樹園ぐらし

倉野 房子（北海道）

特攻に出撃十七日と決まり戦終りて兄は帰り来
縁ありて経験のなき果樹園に兄の注ぎし予科練魂
モニリアに負けるなど樹を洗ひやる大動物に触るる如くに
梨の花叢を成して盛るとき天の明りを返す白さに
一花叢に実れる玉を摘果する残す一粒に期待をこめて
六尺の脚立に登り枝分けて素人技に袋掛けゆく
馬追ひて舗道車に積みりんご売り祭の幟立ち並ぶ街に
米寿とて祝はれむかし嘶する二十歳のわれの果樹園ぐらし

彼方の鯨

田上コト子（北海道）

吟行の四万十川を舟でゆく小石や海老の川底に見ゆ
海原を小舟にゆられ進みゆく彼方の鯨に歓声あがる
ヨサコイの鳴子の音の響きぬて若きら踊る春の舞台に
初鯉の土佐の切り方厚切りにニンニクを添へ夕餉の卓に
鯖雲を沖の方より崩しつつ室戸の海に初秋の風
心まで染めゆく青さ秋深き足摺岬に友とながむる
金木犀の香り今でも懐かしく高知の思ひ出 七年住めり
転勤のはるか高知を引き寄せて川岸近く露の臺つむ

耳

木立 徹（青森）

わたつみの神は小さな耳を持ち浜辺に座り潮鳴りを聴く
ふるさとの潮音はるかに耳ひとつ波が忘れて行つた貝殻
別れたる人の消息さりげなく風の使ひが耳打ちをする
この耳を狼のやうに尖らせてじつと聴き入る時のうねりを
聴き得たる秘密暴かむと暗闇に耳泥棒が待ち受けてゐる
琵琶奏者の平家物語聴き終へて忘れて来たる芳一の耳
妖精の耳のかたちに水芭蕉咲いてゐるなり沢のほとりに
風のごゑ花の言葉を聴きながらわが耳ふたつ野にあそぶ蝶

秋の耳

中里茉莉子（青森）

沢胡桃みのれる大樹の下を抜け馬上に呼吸整えゆけり
北国に生きていること秋の耳そば立ててゆく馬とわたしと
朝露をしとど宿せる道を踏みあやうきまでにやさし馬の目
諸枝の緑したたる道をきて櫛のことばを聴いている耳
森の中にまぶたを開くみずうみに秋を告げくる風の葎むら
新しき敷藁の上に眠り入る馬の双耳かすかにふるう
凌霄花炎えたたす庭還らざる七十余年の父の歳月
半熟の卵を茹でる永遠に会い得ぬ母の手のひら思い

※十五首のうち、八首を抄出しました
都道府県別名前五十音順に掲載してあります。

スノードーム

赤松みなみ（宮城）

十八で進路を決める 大人とは未来に責任持つということ
守られて生きてきたんだ 透明なバリアの中で私は自由
授業中寝たあの子はまだ知らぬ 戦国時代が終わったことを
祖父からの段ボールには手作りの野菜と「受験ガンバレ」の文字
「勝つために今日はかつ丼」なんてしない母は私を知りすぎている
受かっても落ちてでも人生続くから深呼吸せず発表ひらく
「また明日」会える魔法はもうとけて卒業したと初めて思う
思い出はスノードームに閉じこめてふるさと離れる四月一日

思い出

河野 大地（宮城）

尖ってる鉛筆四角い消しゴムと真っ白いままのノートだ、我は
父を持たぬからこそ父は子の我の鉛筆を夜毎削ったのだろう
先輩はいつだってちょっと怖かった背中にそっとあっかんべえ、だ
文豪を気どって写ろうとした写真なんだ前向けと先生は言う
ひやかされ食わずに捨てた初恋のりさちゃん握ってくれたおにぎり
先生についてしまった嘘がある嘘つきのまま記憶されてる
思い出の町はざんぶと波浴びて乾かぬままに気仙沼という町
消したくても消せなくて思い出は消せてもやっぱり消さないだろう

囲ひを蹴つて

武藤 敏子（宮城）

抱きしめることの叶はぬ日々なればぎゆつと思ひ出すをさな児たちを
腕よりあふるる赤児だったきみ囲ひを蹴つて少年になれ
力いっぱい泣いた記憶はしなやかに支へるだらう挫折の体を
風呂敷で魔法の絨緞ごっこするをさなよきみはどこへでも行ける
梅雨あける夏の子たちよ存分に川遊びせよ飛沫をあげて
鼻歌の「げんこつ山のためきさん」カーテンの陰に小さき手動く
いつからだらう遊ぶ子供の声さへも騒音とよぶまづしき時代に
きみたちに渡す未来は沈黙の春にはあらず芽吹きの大地

街に出て来つ

大和 昭彦（宮城）

雨の日の舗道の上に水色の傘ひとつだけゆれてゐるなり
コロナ禍とあれば人ひとりをらずして今日も公園にブランコがある
子どもらのをらぬ夕暮ブランコを手に押してみる一度だけわれは
門毎に葵の花を咲かせる集落に子らの影見あたらす
あの日からずーつとひとりであるだけのことですコスモスの花咲いてます
風吹けばこくんこくんと頷くがごとくにありて狗尾草は
ひさしぶりに街に出て来つ遊びより帰る少年の思ひにゐたり
補助輪をはづして走る幼児にさくら吹雪のはなゆれやまず

冬の空あり

池村 真理（山形）

ぬばたまの闇に不安の満ちあふれりウマチといふ痛みと眠る
痛みたる重き荷となるわが四肢をパーツのやうに取り外したき
手袋を取りたる母の手ゆめに見る病みて歪みし切なき指を
わが内に母の病は六十年を黙して深くふかく潜みぬ
花を愛で金魚を愛でて身をしづめ病馴らして子規は詠へり
身の軋むしぐれ降る夜をさやさやと眠る児を見て時をあたたま
痛む手に絵筆を括り描きしとふルノワールの絵の光りやはらか
薬にてなだめられたるわれの上浅水色の冬の空あり

回遊、小田原江之浦測候所 砂川 正勝（栃木）

黙然と明月門に近づけば吾を導く石板の道
屋久杉の大テーパーの年輪に千年生きし魂を知る
回廊の彼方に見えしシルエツト海より来たる人魚の如し
眼下には波静かなる相模湾ガラスの舞台上に陽光跳ねる
穿たれし天平の石鎮座する園庭に見る幻の甍
湾の上百メートルの回廊を夏至の太陽隈無く照らす
結界に石柱凜と屹立す殺生禁断論すが如く
丘に立ち江之浦の園俯瞰する三世一体カオスを成せり

この畑が好き

井田 徳子（群馬）

嫁ぎ来て米百俵を目標に家族総出の田植もありし
子供らは継がざるままに夫と老い父祖よりの畑耕し守る
子供らは野菜の匂を知らぬとふ年間ならばトマト胡瓜に
少子化と食生活に欧米化米の消費は年ごとに減り
吾のつくる地這胡瓜は人気もの露をわけわけ今朝も挽ぎゆく
いくつまで出来る農かと夕暮を葱の皮むく明日の出荷に
老農の増ゆる畠に時折は友と野菜のことを語らふ
五十年生業として土と生き足腰まがれどこの畑が好き

紅薔薇の悲の一对 植田 眞純（埼玉）

そのかみに噴きたる山を背に入れて撮りし写真の人の在さず
時の雫途切れて君は旅立ちぬ浜辺のやうな余白をのこし
なにとはなく君の名前を空に書く荷物となりし傘の尖端にて
焙烙に麻幹を燃やせば浮かび来る悲命の人の白き微笑は
晩秋の午後の舗道に人はなく素描のごとく公孫樹つらなる
窓際にひとり（モンブラン）食みをればポツンと乗りし和栗への親和
命日の朝の墓前に紅薔薇の悲の一对を挿して帰り来
薄闇のなかにふたりで行きし山並べてをりぬ眠れない日に

孤独なる山

房野 明美（埼玉）

大陸を離れて浮かぶ日本のほぼ真ん中に富士一万年
断腸の火を噴く時をはかりつつ富士は静かに雪をいただく
富士山は孤独なる山ニングンの知性と愚性を見届ける山
分け入らば拒まるるらむわが富士は遠くにありて思ひ見る山
遠景の富士に見守られ青春の草薙の丘駿府公園
はるばるとわれに繋がるをみならも春の野原に富士あふぎしや
羽衣と光をまとひ霊峰を見おろす夢のうちに逝きたし
なんどでも生まれ変はつて来たいから青い地球に富士山永遠に

手賀沼おりおり

小林 直江（千葉）

気まぐれな春風湖面を波立たせ枯れし葦間に小鴨はひそむ
枯れ葦の間より若葦のびのびと色きやかに生命生ひ立つ
水ぬるむ手賀沼べりに草摘めば遙か筑波嶺は春霞の中
花菖蒲群れ咲く岸辺にたたずめば湖面は初夏の光耀ふ
若葦に寄する波音静かにて鳥影も無し初夏の手賀沼
コスモスの揺れる湖畔の遊歩道人それぞれの憩ひのひと時
餌をもらひ人に馴れたる白鳥は留鳥となり北帰行せずとふ
手賀沼と利根の大河には生まれし終の棲家は住みよきところ

神さまのてんびん秤

柴田 文子（千葉）

長梅雨のつひに明くるかさざ波の照り翳ることかなかなのこゑ
草蜋にほふと聞くに摘まみし手嗅ぎてみもする埒なきことを
遠くより君をおもふといふことに慣れて今宵は自粛の七夕
神さまのてんびん秤は長梅雨に溽暑もて季のつり合ひをとる
夏ゆくを告げしならんか法師蝉ふた声鳴きて二度とは鳴かず
彼岸ちかき庭に来てある黄の蝶の母かもしれず あはれ小さき
SFに読めば地上をあきらめしヒトら地底に住むとふ未来
蝉の殻おほひし蟻の砂塚のほろほろ崩れ長月のゆく

青春18きつぷ

鈴木ひろ子（千葉）

コロナ禍に旅する心萎えしわれの背を押す青春18きつぷは
降りたてる銚子の駅に木の香りみちて涼しき風吹きぬける
犬吠の駅より出発する電車に人影のなく初夏の日反す
人混まぬ路線巧みに選ばたる子に連れられて一日旅する
新幹線開通のちは乗らざりし東海道本線普通にてゆく
柿田川湧水池にて冷奴と田楽食ひて旅を続ける
荒川に沿ふ道をきて長瀬の天然水むさばりて食ふ
乗るあひだマスク付くるを義務として青春18きつぷ使ひ切る

同士

芍 薬 (千葉)

母らしい顔ってどんな顔ですか クリスマスローズのうなじうつくし
雨の日は急患多し 「ワンちゃんも歯が命」とう冊子をめくる
「モカちゃんのパパ」として居る病院で擬人化されぬどうぶつは無し
同意書に記す日付はもう初夏で眼を開けそうな仔犬の卵巣
家系図の末尾になることを想えば栗の花匂う水無月の路地
皆いつか終わってしまう淋しさに花屋まるごと抱きたい夕べ
一遍もふくらむことのない乳首星座のように生真面目に在る
母親にならない同士今日もまた朝露のなかへ突っ込んでゆく

禁止に護られ

下田 未田 (東京)

早春にコロナ感染増え始め嫁と娘の妊婦がふたり
ふるさとのエジプトへ帰りお産する嫁に聞きたり感染者数
帰らずに日本で産むと決めれば我が家近くに仮住ひする
ウイルスに我が移らばこの家族を守るのは誰 日差し強まる
目を合はせ笑ひもて直に「おめでと〜」嫁に赤子に言へぬ初夏
早まりて急なお産となりし娘を見送る家族入院入口
いくたびのウイルス感染起れども子は生まれ出で命を繋ぐ
いくつもの禁止に護られ生れし子の泣き声強し長き梅雨明く

はだかの兎

斑山 羊 (東京)

家うつり知らぬ街なかありくほど長年もとめし本と出会へり
あの門で〈アレクサンドリア四重奏〉読みかへす娘と待ち合はせけり
古びたる教養主義の残り香の消えぬ時代に本としたしむ
売れるより大事なる性ひめたれば本とはまことふしぎなるもの
〈売れる品を並べ売るのが商人〉と言ひ切る主人のまばゆき書店
本すべてタブレットに入れ知を誇る身の皮剥がれしはだかの兎
あちのある町の本屋もたそがれて無念あへなし幸福書房
才なきにあきらめし物理学なれどいまだに書店で立ち読みなどす

遠い警笛

中澤 明子 (東京)

「あの頃はフリードリヒがいた」過去形のたが切なくてしみじみと繰る
逃げよ逃げよフリードリヒ、ナチスからきみは悪くないのだからね
かつて見た映画さながらアウシュヴィッツ戸惑いながら鉄門くぐる
痩せこけた身体あらわな子や大人白黒写真は嘘を映さず
牛舎かと思えばそこは収容所冷たき土間に風吹き抜ける
ゆっくりと風呂場のようなガス室に寄れば深く深く胸いたむ
張り詰めた空気やわらぐ大木の小枝にわずか黄葉のつゆ
夕暮を遠い警笛満載の貨車が近づく気配ただよう

心の帆

浦井ひろみ（東京）

春爛漫感染蔓延彌生尽狂風の中世界何処へ

朝にこそ魂やどるパリの街収集車輛のブルーのつなぎ

スーパールの隅ぼつねんと誰を待つロールペーパー未来を語る

悩ましきステイホームに棚奥の庄野潤三読めば風吹く

青葉濃きこの世の終はりわが母は痛む舌先ちろちろと出す

ストレッチャーター仰ぎ見る空果てしなく散らばる雲を砂消して追ふ

結界に入る者あり俗世にてじたばたする吾 くちなし匂ふ

心の帆高く掲げよと綱たぐる波風あらく東へ西へ

休み時間の終り待つ椅子

小林 瑞枝（神奈川県）

令和二年夏の高田の松原に疎になり祈る密なる死者に

朽ちてゆく震災遺構の風景にまだらに増える海の領域

まず避難経路をたしかめ遊ばせる 波よりはやく走れない子は

人間を立ち入り禁止にした森に抱かれセシウムまどろめるかな

廃校にチャイムのごとく海は鳴る休み時間の終り待つ椅子

泥団子づくりの途中で避難したあの日の泥は砂に戻れり

九年分背の伸びた子に見えている海の無間と親の凡庸

短めの夏をくまなく受けとめて東北生まれの朝顔は咲く

妻との職場

宮沢 一（長野）

いつせいに萌芽のすすむ畑に出てアスパラ農家の今年が始まる

山鳩の今日は来て鳴く午前五時アスパラ畑は妻との職場

朝取りの今日の持場は東側妻は西から日替りで採る

軽トラに準備揃えて妻を呼ぶ台風はいよいよ来るかも知れぬ

噴霧する消毒液はアスパラに虹を掲げて消毒日和

暮れてゆく大夕焼をメモにしてアスパラ畑に終る秋の日

夕映のアスパラ畑に妻と打つ秋冬管理の続く年の瀬

アスパラの秋冬管理の終える日は春へ確かな夢がふくらむ

図書館雑記

馬淵みや子（石川）

密避けて一人に絞る長机学習室はすぐに満席

懸命にスマホ断食つらぬきて勉強、読書わきめも振らず

空腹に周り見れども移動なし昼食抜きて座席を守る

ノートとる後ろ姿はみな無垢でサクラサク日を密かに祈る

絵の中に我も飛び込み川遊びトンポにイナゴ追ひて日が暮る

地元生作りし新聞人繋ぐ語るがごとき見出しちりばめ

パーティションで机二分しイスふたつ一つも配慮二つも配慮

机上には市松模様の小箱あり「消しカスどうぞ」とエールを送る

地球か母か

高田 理久（福井）

八度目の退院の朝八度目の晩年に母は小さく息はく
コロナ禍のナースステーション完治ならぬ母をそれでも祝ひくれたり
病室となれる寢室 藍いろの遮光カーテンにまたも閉ざさる
往復で五十キロを駆る実家への日参に吐く二酸化炭素
戦時下をにははす「帰省警察」に小さな町がギスギスとして
蝉声を浴ぶることなく夏は過ぐ親にも会へず過ぎたり
レトルトにテイクアウトにデリバリー プラスチックのその後を追はず
長閑やかな地球か穏やかな母か もう暫くは後者を採らむ

追憶

児玉 普定（福井）

征く父を送る境内の人混みに言葉浮かばぬ七歳の吾
復員の兵の靴音遠ざかる背の妹あやす夕暮
父果てしビルマのピンウエー何処かと戦記読みつぐ吾は中学生
七キロの道を歩みて受け取りし遺骨の箱の軽やかな音
生前の口惜しさ噛みしむる若き兵 食ひ縛る歯の固く閉ざせり
水筒の水を捧げて収骨す今日の成果の遺骨は重し
三十年を経ればビルマは変らじと戦友らの回顧にきき耳たてる
ビルマへの渡航三回果たせども想ひはピンウエーの丘に佇む

夏の朝

浅井 克宏（愛知）

時は夏朝は七時神空に知らしめせども地球の危ふし
ざりざりとコンクリートを齧りつつ蝸牛這ふ朝の壁面
ウォーキングする人びとも近頃はマスク姿に違和感の無し
マーラーのアダージョ流れ空へ消ゆニッポンの夏百日紅咲く
美少年に溺れて死することもなし陽射し溢るる夏のヴェニスに
「これは戦争です」などと簡単に言ふな戦争を知らない大人
マスクせぬ人を糾弾する人の顔はマスクに隠れて見えず
朝食のミルク滴るれば王冠のかたち王冠すなはちコロナ

マスクの孤独

岡本 洋子（愛知）

玄関でマスクを外し天井に本音のような息を吐き出す
裏道でマスクを外し吸う息はみどりに薫る風のかたまり
マスクつけずコロナの世界の外側にいるような目で見る夜の海
口ごもることはマスクの中に解きならんで歩く青葉の午後を
ハンガーにかかるマスクの色ふえて小雨降る朝選ぶむらさき
シャッター街に転がるマスクを拾い上げ看板に掛け男の子が行く
黄金のマントを着けて岐阜駅に立つ信長のマスクの孤独
コロナの世を生き証に取っておく夫と私のアベノマスクは

命のことを

桃生 苑子（愛知）

消毒のスプレーボトル見るたびに小さき手を出す令和の子ども
川を見て海と言ひ張る子の世界まだそのままに狭くていいよ
本棚に「サピエンス全史」と「はじめての育児」並びぬ夫とわたしの
蟬の死をいぶかしげに見る二人子にうまく言へない命のことを
いぢめられし告白多くいぢめたる人少なくて向日葵の群れ
子がいれたアポロチョコ薬箱にありさみしいときに食べると言ひて
何回も絆創膏を貼りたがる子どもは見えない傷を抱きつつ
ベランダで霧吹きをせむ子どもに吾の手造りの虹を見せばや

露草

大石 悦子（京都）

四十軒の家が四つに分けられて野田町二班はグループCなり
話し合ひで決めてください置き場所にまち美化事務所は介入しません
新しきゴミの置場の候補出でマスク同士の表情見えず
八軒の家の建つときゴミ置場はち切れさうな風船とならん
露草がペットボトルの脇に咲きすずしい風の足もとに吹く
われわれの行く末を君に託すよと可燃の袋のささやくやうな
黄の色は鳥の嫌ふと聞きをれど食ひ千切らるる黄のゴミ袋
けふは雨、本格的に降りいだし魚の跳ねる音をききたり

狐のことは

福西 直美（京都）

サボテンの花ひらきたり十六夜の赤みさしたる月昇るころ
ひと晩をわがベランダに眠りたる赤とんぼ今朝はその姿なく
しみじみと瞳の奥にむらさきの色を潤ませ咲く枸杞の花
絵の中の女がずっと泣いている帽子に青き花飾りあり
にんげんはいいものかしら曼珠沙華咲くころ狐のことはを思う
わるいひとばかりも困るがいいひとそれぞれほど多くは要らないだろう
ただ生きているだけでもまたいいものと夕餉のモヤシを和えつつ思う
飛び立てる白鷺のごとベランダに今日は真白きあさがおの咲く

七つをまてず

丸野 幸子（大阪）

鉄塔の空のほりゆく葛の夏義父の五年の軍歴とどく
真珠湾奇襲攻撃せし年の七月半ば召集をさる
三十三歳第貳乙種の補充兵筋骨薄弱丸野千代吉
義父の見し碧とも知らずプルネリア咲く丘に見き高雄の海を
爪哇島ジャワに到着せしは二月尽バタバア沖の海戦前日
軍歴の末尾は一行田辺港上陸復員完結召集解除
マリアに弱りし身体は末の子の七つをまてず死にてゆきたり
帰還せし命につづく命あり 続かなかった命更なり

陸軍棧橋

森 ひなこ（広島）

瀬戸の波寄せくる宇品海岸に近藤芳美の碑は建ちてをり
かつてここ「陸軍棧橋」と言はれしがいま「宇品波止場公園」となる
この地より出兵したる若者のいのちの嗒たび芳美の慟哭
公園に同世代なる若者がのどかに魚釣るスマホ片手に
瀬戸の陽炎ゆらりゆらりと漂ひていま手の平の安寧たふとし
ああピース八月六日の青空に一瞬の光永遠の苦痛
ヒロシマに七十五年目の夏きたる後期高齢者になりゆく都市よ
ゆりかもめ飛び去りし空届かない「核なき世界」「戦火なきこの世」

墨の香

藤井沙千子（山口）

書かずとも文房四宝を置く部屋はわが居る処墨の香のする
裏打ちをなすと霧ふく時の間にわたくしの虹小さくあらわる
日の陰り縁側さむし時のふちに漂うごとく書きつぎている
書きたまる作品どれも反古となし風字の硯に墨磨るひとり
机につく子に寄りゆけば暖かき冬陽の匂いまといておりぬ
手を止めて一人が指さす夕茜朱筆は置きて子等と眺むる
ポストまで封書を持ちてゆく夕べ日々書きつぎて選びし一枚
自らを恃むしかない生き様の葛咲く野辺に鯛をさく

垣結ふ

森田アヤ子（山口）

ゐのししの今し方まで遊びしや稲倒れてゐて水まだ濁る
日の暮れを待ちゐる猪しぞけふのうち造り上げねば延長の柵
山間の田の暮れ早し日かげると見るに葉の先すでに露おく
十耕とまではゆかねど三度打つ大根を蒔かむ真夏日の畝
よるよるを獣ゆくらし草踏まれ土あらはなる垣のすぐ外
藩の匂ひを猪しは三年忘れずとふされば囲ひの中に垣結ふ
家農地そつくり囲む集落の猪の柵三キロメートル
住む人の減りつつ村に延びてゆく迷路のごときトタン猪垣しがき

杳乎貫く

岡本 秀美（愛媛）

片蔭をゆく魂とすれちがふ被爆梧桐葉音の清し
新型の爆弾投下の告知ピラ残しし人の行方を思ふ
長崎の次はあつちやいかんといふ地球のこゑか川音はげし
傷跡は癒えたのだからうか被爆せし建物は消え地図を塗りかへて
ひかうき雲は杳えうこ乎貫く三吉の〈原爆効果測定器〉
「第五福竜丸」の元機関士の計報の履歴に「語り部」とあり
枯れ果てし被爆樹の幹まつすぐにわたしのなかで育ちつづける
ひるがへる鳩の羽音のゆらす空平和宣言の声の立ちをり

傾いてゆく地球儀

片山 一行（愛媛）

少年の人さし指に瘤のあり 私に向けて銃撃つごとくに
苛立ちと等価交換するように原爆詩集のページをめくる
夏の日のしずかに減んで行きながら朝の重さを引き連れてくる
脊椎を引きずる熱き夏の日、手に触れるもの海に化けゆく
戦いの果てに流れている哀歌 地球の軸はさらに傾く
エチュードを拾い読みする夜明け来る 深夜喫茶は核シエルターのごと
争いの際限もなく広がりて、地球儀やがて泡立草の色
この先の海に音なく落ちるのは間違っている白い未来か

佐田岬半島

菅 時雄（愛媛）

半島の付け根のあたり北側に発電をする原子炉はある
あつあつのじやこ天かじり君と見る三つのドーム モスクにあらず
灯台の向かうは九州十六キロ船にて逃げる豊後水道
佐田岬メロデーラインを眺めある五十八基の真白き風車
ひとすぢの道と思へり一号機 四十年の廃炉の作業
『Fukushima50』は現実ならむ「かういふ姿」未だ描けず
佐田岬ふるさとウォークはつ夏のホタルブクロのま白き祈り
子の孫のあしたを願ふ風の丘 風車は回るくるくる回る

遠隔でみる

長野恵梨香（福岡）

インターンシップの学生水嵩の上がった川のように頷く
よそ行きの声ではなくて研修の配信画像はまだ準備中
噴煙が高くあがれば写真映えすると喜ぶ観光客よ
スイミングプールがあった三叉路を工事車両は無人ではしる
五十五トンダンブは黄色の点となる遠隔操作の指示届くまで
丸ごとの揚げたじゃがいも頬張った噴火のにおい大地のにおい
一面に緑ひろがる砂防ダム遠隔カメラに映り込む羽根
ゆつくりと力を緩め三両の黄色い電車のはいる夕暮れ

魔法の言葉

本多 和代（熊本）

静かなる大人の日常掻き乱しパワーアップの年子来たれり
お母さん、ママと呼び方変えながら三歳は上手く親の気を引く
上の孫食の細きは誰に似た。打出の小槌^{みづつ}などありもせず
両頬を子栗鼠のように脹らませ好物はおぼる下の孫なり
幼らのイタズラ許してしまいきり「ごめんさい」は魔法の言葉
「行く行きたい、やっぱり行かない」幼子が親の手離すはもう少し先
スポンジが水を吸い込むようにしていつか増えゆく幼の言葉
水紋は跡形も無く消え去りて水面は静かな日常に帰す

風の仔馬

星野 一樺（熊本）

たんぽぽを小瓶に挿して十日目で綿毛に変わる朝を迎える
真っ白なつばなの花穂光りゆき風の仔馬のたてがみ生まる
上質のレターセットに紡ぐ文字北海道の友に旅立て
映画観ていちごパフェ食べバイバイと友だちがいるふわり夏雲
タオル地のブルーのケットポロポロに星になるのをとどめてくれた
店員がわたくしと言いい和語の持つ白き光が胸に灯れり
夕焼けのトンボの翅に吸い込まれ五歳の私甦りくる
雪の日に足跡つけるキュッキュツと雪の鳴く音小鳥みたいで

島の夜

浜田ゆり子（鹿児島）

漂へる匂ひは牛糞なのだらう遠くに汽笛のやうな啼き声
一周は一時間なりレンタカーを飛ばせば黒き蜜の心地す
ズズンと足を鳴らせば地球の中心に届くはずなり花こう岩の島
キビ畑を左へ曲がれば五分刈りの少年 牛の手綱もてくる
クラクシオンを鳴らす人なしこの島は牛にめつぼうやさしき島なり
黄昏ゆ夜に入りゆくガジュマルに温き体温流れぬるなり
徳之島のもめん豆腐のパッケージ戦ふ牛と赤文字はねる
牛のにほひ潮のにほひに君のにほひ重なりあへば島の夜なり

忘るまじ（平和の礎）

山内さつき（沖縄）

白百合に蝶は舞へども六月の空は重たしけふ「慰霊の日」
彫られたる名に面影を探してはやさしく撫でて無言なりけり
哀しみの炎のごとく立ち並ぶ「礎」に吹くや夏か至南風しべえ
平和とは樹が育つこと「礎」守るモモタマナが枝は深々と濃し
逃げ惑ひ斃れたる民その上を覆ひて戦後の新しき道
忘るまじ言葉に余るその生がその死がありき昭和二十年
疫病の溢るる紙面の片隅に戦争孤児の体験記あり
この星に戦の消ゆる日はありやA I持てど宇宙目指せど